

## 障害のある方と一緒に創る福祉教育のススメ



障害の疑似体験は、障害がある方々の生活のしづらさや不便さを実感し、バリアフリーな環境づくりの大切さを実感するとともに効果的な体験学習方法です。このため、現在福祉教育の一環として最も一般的に数多く用いられています。しかし、障害の疑似体験だけで終わってしまうと「大変」「怖い」「かわいそう」という印象(貧困な福祉観)だけを与えるといった、本来の目的と違う学習になる危険も大きいことに注意が必要です。

「障害者の権利に関する条約」に、

“私たちのことは私たち抜きに決めないで(Nothing us, Without us.)”

という有名な言葉があります。そこで、障害がある方々と一緒にプログラムを企画したり、障害の疑似体験と併せてボッチャ・車椅子バスケット等々のパラスポーツを組み合わせることをお勧めします。



### 新崎先生プロフィール

肢体不自由児施設でソーシャルワーカーとして21年間従事し、専門学校・大学教員として福祉教育や教育支援協働学などをテーマに研究。教育学部 教育協働学科 特任教授。

## 問合せ先

発行者 社会福祉法人 堺市社会福祉協議会

〒590-0078 堺市堺区南瓦町2-1  
堺市総合福祉会館内

☎ 072-232-5420

☎ 072-221-7409

🌐 <https://www.sakai-syakyo.net/>

発行日 令和4年4月1日

協力 キャップハンディ指導ボランティア・さかい



## 疑似体験用具の貸出について

体験学習に使用できる備品を貸出しています。用具の数に限りがありますので、貸出を希望される場合は、お早めにご相談ください。

### 貸出用具

車いす、白杖、アイマスク、点字器、  
シミュレーションゴーグル、点字ブロック  
など

### 利用について

- ① 疑似体験用具は、用具の目的に沿った内容で、十分に注意してご利用ください。
- ② ご利用後は必ず元の状態に戻してから返却してください。万が一、故障、破損、紛失等をされた場合は、必ず本協議会までご報告ください。



# 福祉教育 障害の疑似体験 ヒント集

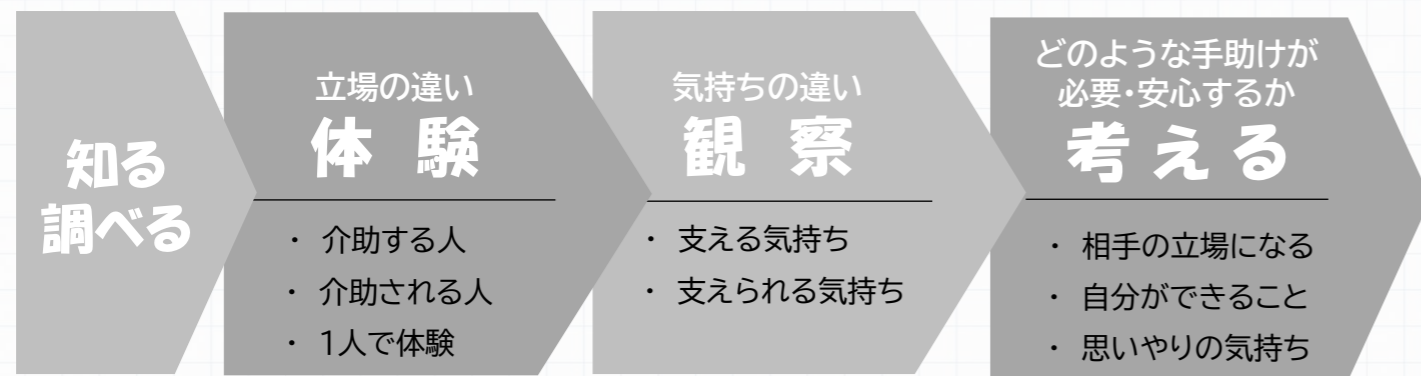


## Introduction

障害の疑似体験は、“障害のある状態”を実際に自分自身が体験し、理解を深める体験型の福祉教育です。この体験から、障害のある方の気持ちの一端・バリアフリーのまちづくり・一人ひとりが偏見や誤解がなく尊重されること・思いやりの心に“気づく”きっかけとなります。

本紙は、障害への“気づき”を促す体験活動を堺市内の学校や団体に25年間のべ1,231回、取り組んだボランティアグループ「キャップハンディ指導ボランティア・さかい」の経験をもとに、体験や学び、気づき等のポイントをまとめました。福祉教育の1つとして障害の疑似体験を実施する際のヒントに活用していただき、一人ひとりが思いやりの心に“気づく”きっかけになれば幸いです。

ヒント | 01 疑似体験の気づきや学びのポイント！



疑似体験だけで終わらず、事前・事後学習で学びを深めることが大事です

ヒント | 02 疑似体験のポイント！

車いす体験



<体験内容(例)>  
車いすの操作、介助

- ☑ 介助者はよそ見や急な発進・停止をしない
- ☑ 障害物など周囲に注意しながらゆっくり進む(目線の違いに注意)
- ☑ 2人ペアの体格・体重差をなくす

脊髄や脳の病気・損傷による麻痺やケガなどで歩くことが難しい人は、車いすや杖などを使います

視覚障害体験



<体験内容(例)>  
白杖・アイマスク  
点字体験

- ☑ 体験者は介助者の腕をしっかり握る
- ☑ 介助者は前を向いて、状況の具体的な声掛けをしながらゆっくり歩く
- ☑ 点字は、街の中や身の回りなどあらゆるところがあるので、探してみる

全く見えない(全盲)だけではなく、視野が狭い、明るさだけを感じる(弱視)など、見え方には個人差があります

聴覚障害体験



<体験内容(例)>  
手話、指文字  
手話コース

- ☑ 手話以外にも聴覚障害者と会話する方法や伝える工夫があることを知る
- ☑ 「聞こえない=話しが出来ない」ではなく、分かり合いたいという気持ちが大切

音の聞こえ方には個人差があり、見た目では障害が分かりにくいいため、誤解を受けることがあります



少しの気のゆるみや不注意から、事故やケガが起こります  
事前準備・確認を行い、十分に注意してください

※インターネット等で操作や介助の方法をよく調べて、安全面に考慮してください

- Q 車いす 介助方法
- Q 視覚障害 介助方法
- Q 聴覚障害 介助方法

ヒント | 03 気づきを促す3つの声かけ！



体験をしてみてください  
どうだった？

支えてみて  
どうだった？

支えられて  
どうだった？

疑似体験の注意点  
(「大変」「怖い」「かわいそう」な体験で終わらないために)

- ・ 障害がある人は、「かわいそうな人」ではなく「少しの手助けがあればいい人」(自分でできることがたくさんあるため、全てにサポートが必要ではない)
- ・ 工夫や人の手助け、教えてもらうことで不自由は少なくなる
- ・ 「出来ないこと(障害)」ばかりに目を向けるのではなく「出来ること」にも目を向ける
- ・ 「他人事」、「体験だから」、「自分には関係ない」ではない

体験から普段の暮らし(心がけ)につなげる

- ・ 障害がある人へのお手伝い(手助け)は、直接手伝うことが全てではない(点字ブロックの上に自転車を置かない、身体障害者用駐車場には車を停めないなど)
- ・ お手伝いが必要か確認するときは、ゆっくり前から近づいて声を掛ける
- ・ お手伝いをお願いされた時は、望まれた方法で丁寧に対応する
- ・ 障害のある人だけではなく、困っている人への手助けも同じ
- ・ 自分が手助けできない時は、できる人に声をかけることも大切な手助けになる

先生や指導者(大人)の方へ

- ・ 答えを教えるのではなく自分で考えるような問いを投げかける
- ・ 先生や親、大人も一緒に体験する機会を作る
- ・ 笑顔と気持ちが大事(車いすなどの使い方やテクニックは二の次)
- ・ 障害者や当事者の方の話を聞くなど、ふれあう機会を作る